

### 第3回 武蔵野市子ども自然体験委員会

日 時：平成16年2月9日(月)  
18時30分～20時30分  
場 所：武蔵野市民会館 第1学習室  
出席委員：安藤委員・石井委員・梅田委員・川住委員・鈴木委員  
高石委員・永田委員・宮寄委員・藁谷委員  
武蔵野市：事務局 子ども家庭部長・教育部長 ほか11名

#### 1. 開 会

梅田 委員長

まず、前回第2回(1/20)議事録について、発言内容等のご確認をお願いいたします。

(事務局)

市のホームページ上にアップする作業のため、2月20日(金)ぐらいを目途に、何かございましたらお知らせください。

#### 2. 議 題

梅田 委員長

前は、事務局から自然体験事業についての説明をいただきました。自然関係については、それぞれ委員さんの持つ体験も切り口も違うわけですから、今回は委員の方から、

- (1)「子どもたちと実際に『自然体験』をする中などで感じていること」。
- (2)「『自然体験』に期待すること」。
- (3)「現在の自然体験事業等のやり方や目的が、私達が理想とするものと合っているかどうか？」

というような議論をしていきたいと思えます。

## 梅田 委員長

まず皮切りに私から、日頃感じていることをお話しいたします。

先日、さる小学校へ呼ばれ、『自然体験とネイチャークラフトづくり』を実施しました。材料と道具を与え、ちょっと見本をみせるだけで、後は「自由に作りなさい。」というやり方をしました。子どもたちは、ものすごく目を輝かせていましたが、小枝を切断するのに、ノコギリと小枝の両方を空中で擦り合わせるように使って切り口をギザギザにしてしまう、キリを固定してドングリを回して穴を開けようとする。今は鉛筆削り器があるからでしょうか、小枝をとがらすにも、ナイフの使い方を知らずに、結局は折ってしまう、という具合でした。それはそのつど正しい使い方を教えていったわけですが、「原始的な道具を使った経験がない」という状況です。便利なものができてしまっていて、完成されたものしか経験せず、このような道具の使い方を全然知らないという訳で、こういうことは我々の年代から見ると、非常に驚きでございます。

さらに、子ども達だけではなく、上の世代も同様の状態にあります。例えば『自然観察会』に参加するお母さん達も、ヤブの中は非常に怖いという感覚からか、防虫剤などフル装備で、すごいガードをしている。ムシの観察でも遠巻きで、「刺すムシ」「刺さないムシ」の区別もできません。また『山登り』において、ある中学生のグループに出会った時も、全員が「クマ除けの鈴」を身につけておりました。このように子どもたちの上の世代も、自然との付き合いがないが故の非常に驚くべき、不思議で、こっけいな行動をとります。快適で便利な社会ではない『自然』というものは、良い所以外にも、危険な所も汚い所もあります。よく知っていれば全然恐くないのですが、その距離感を知らないのです。そういう自然の体験がないという点で、私達との差をすごく感じました。

## 藁谷 委員

私の場合、このような経験のことを語りだしたらキリがございませんが…。9月に読売新聞の特集記事『今どきの子ども』の取材を受けた時にもお話しした話をします。

キャンプにおいて、「カレー作り」をしていた時、初めてのキャンプだった小学低学年の男の子が、自ら包丁の刃に、指をすーっと滑らし、にじむ血を見て泣き始めました。実際に野菜などを切っていたはずなのに「どうしたの？」と尋ねると、「手も切れるとは思わなかった。」と答えたのです。これは実際に物が切れる包丁だけれども、自分の手が切れるとは知らない。「人に向けても大丈夫。」と思っていたのかもしれない。

その他にも、「いつも母親が切れた野菜しか買わないために、自宅に包丁がない」。当然子どもは包丁を持ったことがないし、持つ必要もない、という家庭があります。このような状況に非常に驚きます。

また前回もお話しました30泊のキャンプでは、親にムリヤリ参加させられたという金髪・ピアスの中学生がおりました。キャンプに対して参加意欲が全くなく、大人にすごく反発している状況であった子どもも、最終的にはリーダーシップをとる子どもに変わった。その中学生が別れ際に「今まで生きてきて、大人と初めて話げできた。大人も始めて自分の言うことを聞いてくれたし、自分も初めて大人に正直に話せた。」と話して帰りました。そのような実例を見ますと、子どもが自然に解き放たれて、いろいろな体験をするということは、すごい効果があると思います。

次に、お配りしました資料に沿って、簡単にご説明いたします。

#### 1. 『形式知』と『暗黙知』

言葉にでき、人に伝えやすい知識『形式知』と、ノウハウやコツなどの言葉にならない知識『暗黙知』があります。『自然体験』には、この『暗黙知』の領域がすごくあります。また、この2つがバランスよく保たれることが、子どもの発達段階には必要と感じております。

#### 2. 『社会性』

「人間関係能力」「生活慣行能力」「社会的規範能力」で構成され、それを身につけるためには、「自然との接触体験」「勤労体験」「奉仕体験」「集団体験」「自己充足体験」「生活体験」が必要です。これらはまさにキャンプの中に含まれています。

#### 3. 『三間がない』

今の子どもたちは、「時間がない」「空間がない」「仲間がいない」。

#### 4. 『欠落体験』

今の子どもたちは、次のような体験不足になってはいませんか？

「自然に触れる体験」

「異年齢集団に触れる体験」

「自発的活動の体験」

「社会参加体験」「勤労体験」

「困難を乗り越える体験」

「基本的生活習慣確立のための体験」

これらもキャンプにおいて、すごく含まれています。

#### 5. 『人間らしく育つ体験』

「『人間らしく育つ体験』が必要である」ということで、

- 「二極対立体験」(暑い 寒い・便利 不便 など)
- 「境目体験」(昼と夜の境目・危険と安全の境目 など)
- 「追体験」(「技」「技術」など、例えば「マッチを擦る」「卵を割る」)
- 「原体験」(「夕焼けを見る」「1000m以上の山に登る」など)

次に、野外教育の様々な専門家の研究より、

- 『自然体験活動の教育的効果』
  - やる気が身につく(達成動機の向上)
  - 自信が付きやす(有能感の向上)
  - がまんと責任感が身につく(自律心の向上)
  - 友だちができます(他者受容感・凝集性の向上)
  - 物事を自分で判断します(自己決定感の向上)
  - 自然への気づきが身につく(自然意識・感性の向上)
- 『自然体験で個人が成長するには』
  - グループで何かを為し遂げたり、解決する場面があること。
  - 苦しいことや大変なことを自分でチャレンジして成功する場面があること。
  - 本物に直に触れる機会があること。
  - 状況を把握し支援できる指導者が介在すること。

私としては、我々大人がすべきことは、ここにあるような体験不足からくる子どもたちの変化を嘆くよりも、「奪われた機会や体験の場を意識的に、計画的に増やさなければいけないのでは？」と実感しております。「こうあるべきだ。」という考え方を強いるのではなく、そういう場を経験させるというのが我々の義務ではなのでしょうか。

安藤 委員

小学校の『図書室開放』に来る1～3年生の子ども達は、実に好奇心旺盛で、材料等を用意しておくだけで、のびのびと遊んでいます。

反対に『ジャンボリー』に参加する4～6年生は、「次、何すればいいの？」と頻繁に聞いていきます。

そして中高生の世代になると、「めんどくさい。」という言葉を使います。「考えるのが面倒だから、これこれと指示してくれ。」と言うのです。これには非常にビックリします。これらは、全ての子どもに当てはまるわけではなく、『ジャンボリー・サブリーダー』に継続して参加しているような子どもは、ちゃんとリーダーシップを発揮し、自分達で考え、実行していけ

るように変っていくことから、子ども達が元々持っている『想像力』や『好奇心』などは、年齢がかさむにつれて無くなってしまっているのではなく、出し惜しみしてしまっているのではないかと強く感じます。

私が『自然体験』に求めたいのは、一日お腹が空くまで飛び回り、泥んこになろうが、びしょ濡れになろうが、時間を忘れて没頭し、次に何が起こるが分からない体験をすることで、自分達で考えて乗り越えてほしいし、いっぱい失敗も経験してほしいということです。そこから何を学ぶかは、その子ども次第ですが、元々持っているその力をどんどん発揮して、『考える力』『生きる力』につながっていければ良いと思います。理想を言えば、ハバロフスクのような人間の手が入っていない大自然の中で、最低限の文明の利器だけで生活すれば良いのですが、継続してまたは常時遊べるような『里山体験』の場を武蔵野市の中に作ることができれば一番ですし、週末に日帰りでも里山へ連れて行ければ良いのだと思います。

川住 委員

私は『ジャンボリー』を始め、その他の地域の行事等でも子ども達と関わっておりますが、「子ども達が持っている可能性というのは、非常に大きいなあ」と感じております。

例えばハイキングで山登りでは、子ども達は非常に嫌がります。それでも希望を募ると、友達同士誘い合って参加する訳ですが、実際に登ってみると、子ども達の顔が次第に『生き生き』してきます。ちょっとした山であっても、年齢や回数に関係なく、その表情などから『達成感』が非常に大きいと感じられます。このような『達成感』というのは、子ども達の経験となっていくと思います。中には途中でめげてしまう子どもも出てきますが、それをカバーする子も出てくるなど、『人間関係』を学ぶ場でもあります。そうした中で、子ども達はいろいろな経験を積み、子どもなりに努力をし、様々な事柄を自然とうまく学んでいく、というところがあります。

『自然』の中で遊んでいる子ども達を見ていると、場面場面でその可能性が発揮されるところが見受けられます。そのような自由な空間・非日常の体験は、先程の『原体験』につながるということで非常に効果があるのかな？ と思います。

また子ども達の大嫌いな「料理の後片付け」では、その性格がはっきり見てとれます。今まで何もしなかったような子が、急に率先して場を仕切ったり...と。そのような場面を見るたびに反省してしまうのが、「大人が決め付けてしまっている」、「子どもを見る目に壁を作っているのではないか」ということです。また、こういった優良な活動の中で、本当に学ぶべきも

のは、むしろ大人の方に多いのでは？ とつくづく感じております。

まとめとして、『ジャンボリー』を通じて得られる事の大きなものに、『人間関係』があります。異なる世代が『ジャンボリー』を通じて知り合える素晴らしさ。また、『子どもたちの可能性を信じて、任せてやらせてみる』と、それなりの結果を出せるという事で、そこは子ども達を信じてあげても良いのかな と思っております。

鈴木 委員

今回は『セカンドスクール』ではなく、普段教師として子ども達と接していて感じることをお話ししたいと思います。

授業をやっていて一番心配なのは、『国語』での「物語や詩の読み取り」です。例えば「谷川のひんやりとした水」という文章から、谷川の情景をイメージできていないのではないかと感じます。それは「体験していない」ことが原因だとは思いますが、分かっている当り前と構えていては、授業はできません。「何も分かっていない」「何も知らない」というスタンスで接してあげると、コミュニケーションがうまくいきます。

『算数』では、図形とか数の操作をしている時に、具体物を動かすということが昔より減ってきているのではないかと感じます。

『図工』などで、絵や落書きを見ても、『物の認知・認識』が10年前の子どもたちと比べて、幼くなってきていると感じます。これは何故だと考えた時に、スイッチを押せば答えが出てくるような便利社会の中で暮らしていて、手先や五感を働かせて、自分で働きかけたり感じたりする経験が減っていることが原因ではないでしょうか？

私は、以前八丈島で勤務しておりました。「武蔵野市の子」と「八丈島の子」とは、能力的には差は感じませんが、経験に裏付けられた知識の差を感じます。「八丈島の子」は自然の知識をたくさん得ているが、都会暮らしの経験は全くない訳で、社会科見学で東京へ行くとなると、『セカンドスクール』に行く「武蔵野の子」みたいな状態です。『自然』などに代表されるような、便利でない場所・機会を意図的に、できるだけ多く与えてあげる必要があり、そこから子ども達がいろいろな事をつかんでいくためには、こちらが意識して「こういう事を学びなさいよ。」と構えるのではなく、自然につかむのを待ってあげるべきだと思います。

児童青少年課長

ある会議で、「『セカンドスクール』等に参加する最近の子どもの中には、皆と一緒に寝られない子どもが増えてきた。」という話を聞きました

が、このようなことは感じますか？ また、そういう子は、皆とお風呂にも入れませんか？ 特別に時間をずらして入浴させたりするのですか？

鈴木 委員

感じます。「家の子は、皆と一緒に寝られないので、別室に寝かしてくれ。」と申し出る保護者もいます。ただ2～3日目までは、そういった姿なのですが、4～5日目ぐらいからは、皆と一緒にないと気がすまないという感じになります。お風呂については、そのような配慮をしております。

高石 委員

まず、地域子ども館『境南あそべえ』でのお話をいたします。「木工細工」で子どもたちが『巣箱』を作ることになり、図書室で調べながら、いろいろと考えているうちに、「作る前に、まず学校に飛んでくる鳥の種類を調べてこよう」と、現在宿題となっております。このように、ただやらせるのではなく、まず子ども達にイメージを抱かせ、その後現実に近いものというように、考えさせながら指導しています。

また先日、施設の子どもの『山登り』に引率してきました。頂上には雪があり、子どもたちは自分たちで工夫して「雪だるま」を作ったりして遊んでいましたが、「何が何でも、雪を持って帰りたい」と言い出し、大人達が無理と思っても、それを成功してみせました。目の前にすることをやってみようと思う、子ども達の自由な発想が見られました。

現在の子どもの達は、「楽な方へ流れる」「苦労したくない」という傾向があると言われていますが、『ジャンボリー』のハイキングを見ている、遊びの中で山を登っていき、子ども達の中でも協力し助け合います。『川遊び』にしても、その『開放感』からか喜びはひとしおであります。また門限なしに、夜まで友達と『キャンプファイヤー』や『星の観察』をすることは、嬉しいことであるようです。『自然体験』をすることで、そのような面が見られるということは、子ども達の魅力の一つであると感じました。

宮崎 委員

私は『ジャンボリー』には参加したことがないのですが…。長女は、幼い時より体が弱く、目の前に小さなアリがいるだけで立ちすくんでしまうような子どもでしたが、『ジャンボリー』に参加して、大きく変って帰ってきました。友達同様にムシには悩まされたようですが、小学4～6年の3

年間とサブリーダーにも参加したので、ムシを超える魅力を発見したのではないのでしょうか？ サブリーダーの時などは、いろいろなことを任せてもらえた事が嬉しかったようで、大きく成長するキッカケとなったように思います。その後『自然クラブ』にも興味をもって参加し、たくさんのムシの名前を覚え、標本づくりに夢中になり、武蔵野市では珍しい野鳥を見かければ、その名前を言い当てたりと、ビックリいたしました。

たしかに武蔵野市では、非日常的な『自然体験』ができる場がありませんが、できることはあると思います。私の家では、大のムシ好きである下の子どもが、学校帰りで捕まえてきたムシは必ず飼ってやり、その成長を見せてやりました。また、給食のグレープフルーツやビワの種を庭に植えてみたり、東京の夕焼けや星空を眺めてみたりと、日々、近くでもできる『ささやかな体験』があると思われれます。ちょっとした事でも子ども達は変わってきます。子ども達に興味を持たせ、感性を磨かせることが大人の役目であると思っております。

#### 永田 委員

前回の会議の帰り道の9時半頃、電車の中でムシやムシと物を食べている子どもがいました。小学6年生ぐらいで、首から携帯電話をぶらさげ、見た感じ「塾帰り」のようです。注目していると睨み返され、その大人社会に恨みがあるような冷たい目は、「怖いなぁ」と思うと同時に、『孤独感』を感じました。最近の学校の先生はこのような目で見られることがあるのか？ と心配になってしまいました。

話しは戻って、子どもってすごく『創造性』があり、『可能性』があると思っております。ですから火が点けられなかったり、マッチが擦れなかったりするのには、そういう場がなかったからで「できなくて当たり前」です。子ども達により『社会性』を身に付けさせるためには、我々がどうしたら良いかを検討し、今ある25事業を見直しつつ、そのような場を設けていくというのが、武蔵野市の統一した考え方でできればと思っております。

結論から言いますと、『自然の中で放っておけば良い。』というのが私の考え方です。自然から切り離されている訳ですので、藁谷さんのようなプロで、ノウハウを持つ方が上手に教えていく必要があるかと思いますが、私が小学生を郊外へ連れて行くときも、いわゆる『ほったらかし』です。もちろん生命に関わらないかぎりではありますが、ザリガニやムシがいるところでは子ども達は勝手に遊んでいますから、大人は見張っているだけ。そうした中で、子ども達は何かを見つけてきます。自然の中では、工夫し



て魚を採ったり、バッタを捕まえたりして、特に低学年の子どもは、学校とはまた違う輝きを見せます。

前にもお話ししました『ハバロフスク100人の冒険』へ行った時、一番『結束力』が生まれたのは、やはり一番過酷な所に行ったグループです。そうした中で『社会性』や『思いやり』を学んだと思います。そうしたグループは、今でも声を掛ければ集まります。『自然体験』だけとは関わらず、子ども達はほうっておけば、またはそういう『場』を設ければ、それなりに工夫して、それなりに仲間と学んでいきます。我々が意図しても、必ずしもその通りなるか分かりませんが、そのような『場』を設けてやるのが我々の役目なのかなぁ、と考えます。

私は武蔵野市においても、実は「そういう事ができるのではないか？」と  
思っております。前回、『ビオトープ不要論』のようなお話しをしましたが、その後勉強して、「いいなぁ」とすっかりと趣旨変えをしてしまいました。ただ『ビオトープ』を「盆栽」のように大人の趣味の観賞用にするのではなく、ザリガニを放すなど、自然に開放してあげれば、子ども達は自分らで工夫すると思います。つまり「お勉強の場」ではなく、子ども達が『創意工夫できる場』を、武蔵野市の少ない緑の中、コンクリートに囲まれているような場所でできればと思っております。

結論としては『ほっといても安心で、子ども達が創意工夫できるような場所』を、まず武蔵野市で見つけられればと考えております。

石井 副委員長

「最近思う事」ということで、先日の雑誌に、千代田区の中学校の記事が出ておりまして、九段中の人気は急上昇、名門の麹町中の人気は低下しているそうです。それは、H18年度からの九段中の「中高一貫校化」によるのが原因で、「高校受験を苦労させたくない」という親の意向によるものだと考えられます。「本当にこれでいいのだろうか？」と思います。

多摩地区から区部に赴任して感じることは、「非常に優秀」ということです。ペーパーテストをやると、ものすごく良くできます。例えば私は、理科で問題解決能力をはかる、「条件制御・変数制御」の問題をやらせるのですが、小学生にとってはすごく難しい問題でも、区部の子ども達は非常に良くできます。ただ実際に理科の実験をやらせると、実験の企画ができません。つまり『操作性』を全く持っていないのです。『操作性』に関しては、多摩地区の子ども達はすごくできます。非常に驚きですが、それを何とか育てたいと思っております。もう一つの違いは、1つの出来事から要因を複数出そうとしない。1つの要因で満足してしまうところがあります。

スーパー・サイエンス・ハイスクールの学校と、そうでない学校を調査したのがあります。確かに学力レベル的には差があっても、前者の生徒は物事の考え方が一元化しており、後者の生徒達は多元的に物事を考えられるという結果が出てきております。そのあたりが『自然体験』などに関係するのではないかと考えております。

梅田 委員長

皆さんにお話しいただき、概ね「『自然体験』は良いことだ。」と方向性は一致しているようであります。要因はいろいろとあるとは思いますが、『自然体験として効果が期待できるもの』ということについての資料がお配りしてありますので、石井副委員長からご説明願います。

石井 副委員長

これまでの議論からいろいろと兼ね合わせていくと、結果的には『過去は良かった。』というものになると思います。ただ過去の子供達は、そこら中にいろいろな物があり、どの家庭においても、子供が自然にその場所へ行き、取捨選択、またはたまたま、いろいろな体験をすることが十分にできていました。現在はそれができ無い状態なのだから、『時間』『場所』『お金』がある程度限られている中で、やはり「どこかしらがそれを用意しなければならない。だから『市』という行政機関が用意をしよう。」というのが、今回の取り組みだと思っております。

『時間』『場所』『お金』も限られてくる中、ある程度を行政機関が用意をする訳ですから、少し語弊があるかもしれませんが、『最低限』『平均的』に、「ここまでは、大人になるまでに子供達に体験しておいてもらいたい。」というものを揃えなければなりません。そして、「どんな内容を?」「どんな場所で?」「どのように用意する?」ということを考えなければならない。つまり、子供はそんな目的を考えてやる訳ではないので、大人は子供達に「こういう力を育ててあげる必要がありますよ。」ということをお前提に立てて、「そのために、どれだけのものを用意しなければならないのか?」ということをお裏付けしなければなりません。

ここで私が持ってきたのが、『広島大学』と『吉備少年自然の家』の資料です。これらは、『体験に対してどれだけのものが育つのか?』ということをお研究したものです。これらは、他のいろいろな所で調査研究されているものと、言葉が違っただけで、内容的には一緒であると思われまますので、行政的には何らかの形で統一を図り、『こういうものが育つ。』という軸をお作

る必要があります。それに対して、どんなプログラムを組み立てたのならば、それがより効率良くできるかということ、検討する必要があります。そうしていけば、説明責任が取れ、「これだけは保障されます。」ということが、言えてくるのではないかと思います。つまり、いろいろな人の意見を聞いていくと「これも大事」「あれも大事」といろいろな意見が出てきますが、それを全部は用意できないので、それらをできるだけ包含できるような形で整理された一つの『軸』というものが必要であるという訳です。

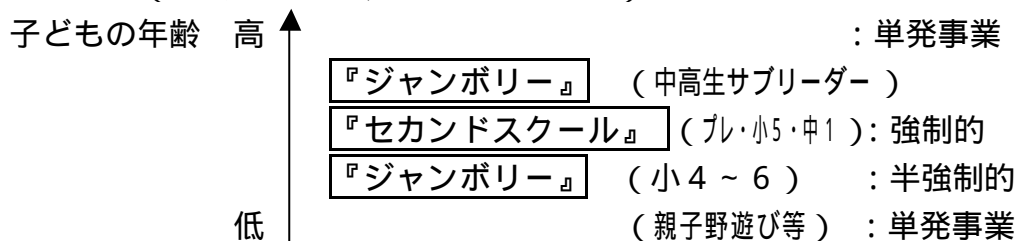
次に、これらを私なりに整理し、6個に大別してみました。

- 関心
- 態度面、情意面
- 能力面
- 技能面
- 人間性
- 自然認識（自然に関する知識）

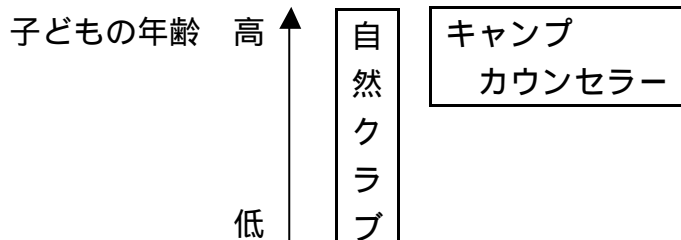
このような大きなカテゴリを作り、一つの軸として整理をして「育てる」という『目標論』にしていけば良いかと思います。

もう一つの軸として整理しなければいけないのは、今、武蔵野市が行なっている事業をもとに『方法論』を考えることです。

パターン（年齢に応じて、活動できるもの）



パターン（希望であるが、継続して活動できるもの）



『ジャンボリー』は「希望制」で実施していますが、子ども達が誘い合うという良い意味での『半強制的』であります。その点『セカンドスクール』は、「全員参加」というのが核になり、いわば『強制的』にどんな子

どもも必ず引っかけります。武蔵野市の場合「この『核』をどう活用するのか？」が意味を持つてくると思われます。

また、今実施している企画やイベントをこのような形で整理し、行政の組織体としてこれを「誰がどのように企画し、分担し、実施していくのか？」、「今後はどのように繋いでいくのか？」、「核である『セカンドスクール』の前後をどう見据えていくのか？」、またはもっと新しい枠組みやイベントの組み方をプランニングし、そこに先程の「『育てる』という目標論」を絡めていけば、一つの『方向性』は出せるかなと思ひます。

梅田 委員長

非常に理解しやすい、ご説明ありがとうございました。

この図の横軸に、先程の ~ の『目標・目的』としての項目を、そのプログラムの項目として書き込めば、どのプログラムがどの位置にあり、「それで充分か？」、「意味があるか？」など判断するための参考図になるのか、と感じます。

石井 副委員長

これはあくまでも、現在のものを当てはめただけですので、これをさらに分析して、例えば「この事業は、今は子どもの選択に任せてるが、学校のカリキュラムとして『強制的』に含めた方が良い」だとか、「『ジャンボリー』は自由度はあるが、今後は指導者にこういう点を意識してもらいたい」とするののも一つの『方法論』かもしれません。逆に、誰かしらが大枠を捉えてチェックをし、教員を含めて関係者の研修を実施して調整を図っていくなど、いろいろな方法を、これから先に考えていかなければならぬと思ひます。

梅田 委員

例えば「いろいろな可能性があるのだから、ほっといて覚えるまで、やらせた方が良い。」など、いろいろな考え方があるとは思ひますが、私は基本的な問題は、「教えていくべきではないのか？」と考へております。いろいろな事を「自得してもらおうプログラム」と、「習得してもらおうプログラム」とに分かれると思ひます。「体験して取得する」ものと「学んで、真似る」ものは別だと思ひます。

児童青少年課長

今日皆さんのお話しをお伺いし、

「子どもは『創造性』等、潜在的にいろいろな能力を持っている。やれば、または任せればできるが、現在のスイッチ一つで何でもできてしまう便利社会が、子どもからその機会を奪ってしまった。その結果、好むと好まざるに関わらず『体験』が欠落してしまって、『スキル』部分でも、『人との関わり・人間性』の部分でも、いろいろな事ができなくなってしまった。」

という共通認識があったと思います

「『効果』が挙っているか？」を測定するにあたっては、そもそも「『狙い』は何なのか？」ということを確認にさせなければなりません。今後は、ここをはっきりさせていただくと後の話が楽なのかなあ、と感じます。

もう一つは、行政の立場を非常に配慮いただいた御発言が多かったのですが、この委員会としては、単に「市や学校などの、『行政』が何をします。」というだけではなく、「家族でも、子どもが持ってきた種・ムシを大事にしましょう。」というように、周りのものを含めての提言をどんどんしていただきたいと思っております。

梅田 委員長

今のやり方で、「これは何の目的か？」というところを考えていきますと、前回に市の方から示されたプログラムでは、掘みがたい部分が多々あると思えますが…。

児童青少年課長

先程の図の『横軸』の話になってくると思うのです。石井委員や藁谷委員の資料を参考にして、「こういうものはいかがでしょうか？」と仮の案として、そのコアの部分を示すことができれば良いと思います。

そうすれば、「こういうのがあったらいいね。」というような、割と自由な議論にも発展するかと思います。また「単に『行政』だけではなく、『親』もこういうことを大胆にやってみたら」と提案するという事もできるのかな、と思います。

藁谷 委員

すごく難しいことだと思いますが…。この委員会の場で、「具体的に何をやる」という『コンセプト』が無いのではないのでしょうか？ まず、皆が分かる言葉で『お題目』やら『目標とするコンセプト』を作るべきです。

それで、今、行政がやっている事業は活かしつつ、「何が合っていて、合っていないのか?」「何か新しいものを作っていくのか?」「子どものためにどうするのか?」「支援する?」「強制してやらせる?」というようなことを考えていけばよいと思います。

川住 委員

賛成です。現段階で、この25事業に × と評価することは、あまり生産的ではないと思われます。まず我々は『理想論』として、「こういったもの・イベントが必要なのではないか?」「こういう能力を伸ばしていく必要がある」などを、各委員がそれぞれの考えを次回に持ち寄りましょう。その中で必要なイベントを導き出し、これに25事業に照らし合わせて、「どの辺に合致するのか?」「しないのか?」「優先順位が低い」「それとも全く新しいものが出てくるのか?」というような、最初の入口の部分があった方がよいかと思われます。そうでないとこの委員会の意義が生かされないのではないかな、と感じます。

梅田 委員

その方が、我々も議論がしやすく、用意に提言できるような気がします。『自然体験』というものは色々な効用があるため、どれもが良いという評価になってしまいがちではありますが、『時間』『場所』『お金』等が限られているという前提条件の中で、どのようなプログラムを採用し、組み立てていくかについては、やはり何らかの『ものさし』が必要ではないか? と思います。

石井 委員

今回、現在の子供達の状態について、各委員が日頃より感じているものが出てきたと思いますので、事務局で、それを『キーワード』化して整理していただくと、「今の武蔵野市に住む子供達の現状・不足点」というのが、見えてくるかと思うのです。その時に、その整理されたものを見ながら、皆さんが経験的に「こんなことをやってみたらどうかな?」と次回に議論できたら良いのではないのでしょうか? つまり、今武蔵野市がやっている25事業はとりあえず置いておいて、次回以降に、整理したものと25事業をもう一回『方法論』というレベルで見直していく、という手順はいかがでしょうか?

#### 子ども家庭部長

まず前提として、今日お出しいただいた数々のご意見等を参考にしながら、我々の方も少し『キーワード』を整理させていただいて、「どういう形でまとめられるのか？」とともに、『ものさし』を組み立てる方向、あるいは、できるだけ体験を増やしていく方向でいくのか？ということも軸に考えてみたいと思います。そして、次回の委員会の前までに、各委員さんへ資料をお送りさせていただきたいと思います。

そして次回は、これをネタにしてご提言いただきたいのですが、特に今ある25事業などの、『事業』や『イベント』にこだわっている訳ではありません。そのあたりは広く考えて、「『欠けているもの』という視点」、「目指すべき『事業』や『場』の方向性」というものの他、今回出ました「『場所』(物理的な場)が必要」との話のように、「こういう場を持つべきではないか。」「公園というのは、こういう視点からも見ることができる」というような観点で、自由にお話ししていただいても構いません。

また、このような形でお話ししていただければ、だんだんと進展していくのかなと考えます。

#### 児童青少年課長

これから5年、10年の『方向性』の話なので、「欠けている部分」、「新たにこういうことをやるべきではないか？」という事柄は当然出てくると思います。それで、今ある事業の再配置をしたり、新たなご提案をいただいて、思い切り大胆なことをしてみる、という結果も出てくるのかな、と考えております。このようなことを見据えた上で、今後ご提言を示していただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 次回の日程について

第4回：平成16年3月4日(木)午後6時30分～

場所：武蔵野公会堂 第1会議室